
調査レポート●学校文化／パート2

中学校時代を終えて

——高校生がふり返る3年間——

東京学芸大学助教授 深谷和子



中学生活のまっただ中にある生徒たちにとって、それぞれの時点で体験されている中学生活の意味は、以上見てきた通りである。しかし物事は、その渦中にある時より、一步そこを出て外側から、またはしばしの後に過去をふり返ることで、一層その意味が明瞭になることもある。そこでここでは、サンプル

を変えて、つい半年前まで中学校に在学していた高校1年生たちに、中学時代の3年間をふり返ってもらい、パート1とはまた別の角度から、現代における中学生活の意味と、学校が生徒の成長に果たす機能を明らかにしてみようとするものである。

第 I 章 中学生生活の概観



1. サンプルについて

調査対象は、広島、鳥取、島根の県立高校（4校）に在学する高1男子520名、女子659名計1179名で、うち2つは、国公立大学への進学者が毎年100人以上というAランク校、1つがBランク校、残る1つが、国公立大学への進学者5人程度というCランク校の構成になっている。

まず図1は、出身中学である。公立中学出身者が全体の85%。図2は入試の体験だが、偏差値による受験指導のメリットというべきか、全体の90%が、他校を受験していない。挫折体験をもつ者は、わずか4%である。

次に図3は、中学校の荒れ方ともいうべき

側面で、3分の1が平和な学校。他は大なり小なり「荒れた中学校」の側面をもっている。しかし、「全くひどい状況」を体験した者は、全体の7%ほどにすぎない。大部分は、問題はあっても、大きな問題に至っていない様子である。これが現代の中学校の一般的な姿とも言えるかもしれない。

次に部活動の様子が図4・図5である。9割近くが部活動をやり通し、7割強が一応熱心に部活動にとり組んでいる。現代っ子たちが中学生活で一応フィーバーできるのは、こうした側面だけともいえそうである。

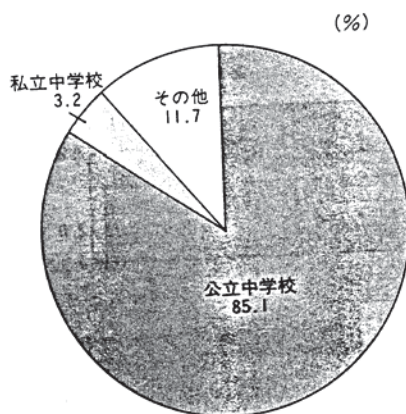
しかしそれに比べると、勉強の方はいまひ

とつという感じで、図6を見ると、3年間通して「かなり頑張った」者は男子で5%、女子で4%しかいない。「途中からわりと頑張った」を合わせても、4割程度にすぎない。同様に通塾の様子も、図7に示したように、(休みの期間でなく)通常のと時期に通塾した者は思ったほど多くない。どの学年も全体の3分の1が通塾したにすぎない。

しかし、とは言ってもすぐ目の前に、高校受験が待っている。早晩入試に向けて、勉強一途の生活に入らなければならない。その時

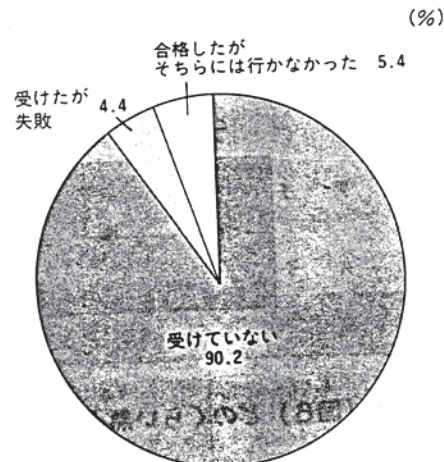
点から中学生の不幸が始まる、とも言えるだろう。さてその時期はいつ頃なのか。表1は高校受験を意識し、一応の受験体制に入った時期を尋ねた結果である。表が示すように、そのスタートは意外に遅い。2年生の半ば過ぎまでは、全体の6%程度、2年生が終わる頃になってが、やっと13%。3年になってが25%。ピークは3年生の半ば頃で、38%。入試の少し前になってやっと、というつわ者も19%ほどいる。思ったより入試の影に苦しめられていない中学生生活と言えそうだ。

2-(図1) 出身中学校

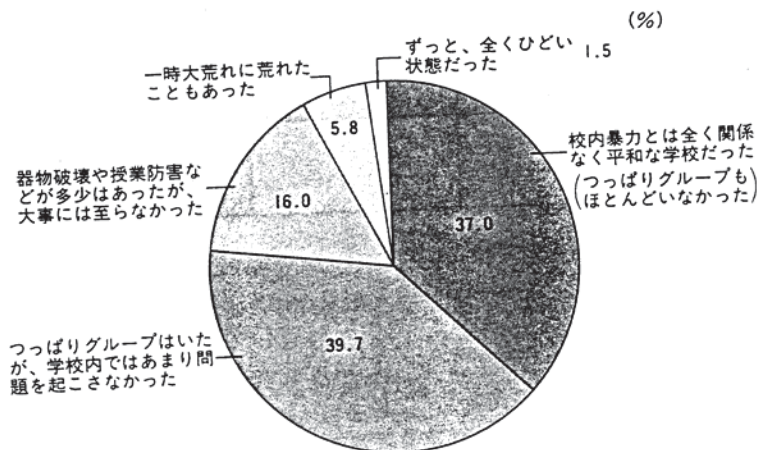


2-(図2) 入試体験

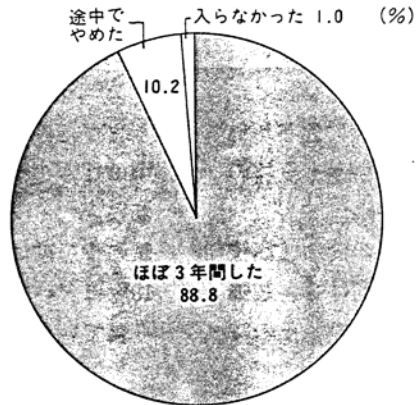
(あなたの入学した中学校以外に他の中学校の入試を受けたか。)



2-(図3) 校内暴力の有無



2-(図4) 中学校時代の部活動



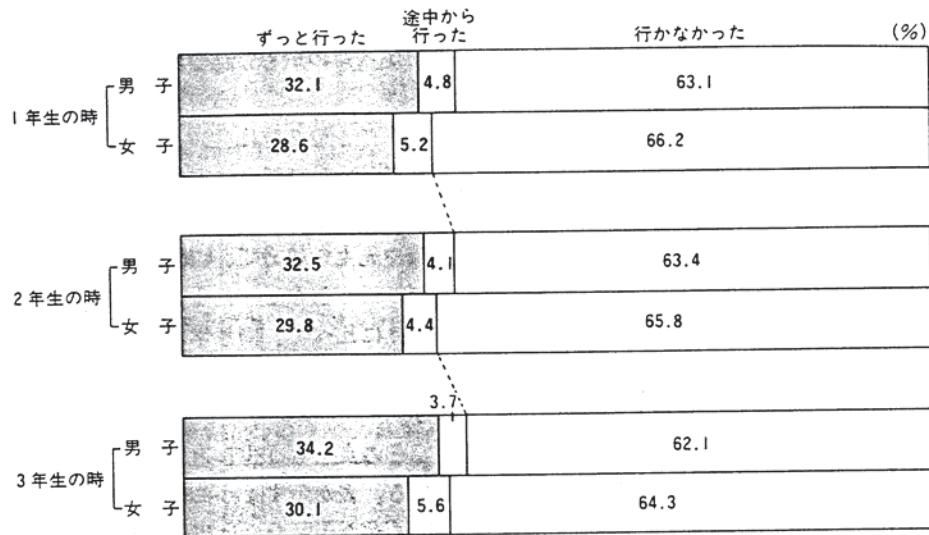
2-(図5) 部活動をどのくらい熱心にやっていたか
(中学校でほぼ3年間部活動を続けた人だけ)

| | とても熱心にやっていた | まあ熱心にやっていた | あまり熱心でなかった | ぜんぜん熱心でなかった | (%) |
|----|-------------|------------|------------|-------------|-----|
| 男子 | 25.2 | 47.3 | 24.3 | 3.2 | 3.2 |
| 女子 | 17.0 | 55.5 | 25.5 | 2.0 | 2.0 |

2-(図6) どのくらい熱心に勉強したか

| | 3年間かなり頑張った | 途中からわりと頑張った | あまり頑張って勉強しなかった | ほとんど勉強しなかった | (%) |
|----|------------|-------------|----------------|-------------|-----|
| 男子 | 5.3 | 36.6 | 46.8 | 11.3 | 3.5 |
| 女子 | 3.5 | 30.8 | 53.6 | 12.1 | |

2-(図7) 中学校時代、学校のある期間に学習塾へ行ったか



2-(表1) 高校受験への意識

(高校受験をいつ頃から意識し始めたか・高校受験を考えて、よく勉強したとか、したいこともがまんするなど)

(%)

| 時期 | 性別 | | 全体 |
|---------------|------|------|------|
| | 男子 | 女子 | |
| 中学校に入学した当初から | 1.5 | 2.1 | 1.3 |
| 1年生の後半から | 2.1 | 1.2 | 1.6 |
| 2年生になってから | 4.4 | 2.3 | 3.2 |
| 2年生の終わり頃から | 13.7 | 11.9 | 12.6 |
| 3年生になってから | 24.6 | 24.4 | 25.0 |
| 3年生の半ば頃から | 35.2 | 39.0 | 37.5 |
| 入試の少し前になってやっと | 18.5 | 19.1 | 18.8 |

2. 生徒たちの人間関係

さてここで少し目を転じて、生徒たちをとりまく3年間の人間関係を見てみよう。

図8にそれを示した。図は人間関係がうまくいっていた順に並べてある。いちばんうまくいっていた人間関係は、「学級の同性の友だち」とで「わりと」「とても」うまくいっていた者が、85%にも達している。

次が部活動の友だちで、同じく75%前後、次いで母親との間で7割前後。すなわち、うまくいっている順は、

1. 同性の友だち
2. 部活動の友だち
3. 母親
4. 担任の先生
5. 父親
6. (担任以外の) 先生
7. 部活動の顧問の先生
8. 異性の友だち

となる。ここで不思議なのは、部活動の顧問の先生のランクの低さである。7位、「うまくいっていた」者は、50%をわずかに超えた程度にすぎない。図5で見たように、部活動に打ち込んだ割には(部活動の友だちとの関係は深まったが)、顧問との関係ができなかった様子である。部活動の中で、教師は何をしていたのか。単なる技術コーチや責任者にとどまって、生徒たちとの心の交流ができてい

なかったのかもしれない。これでいいのだろうか。

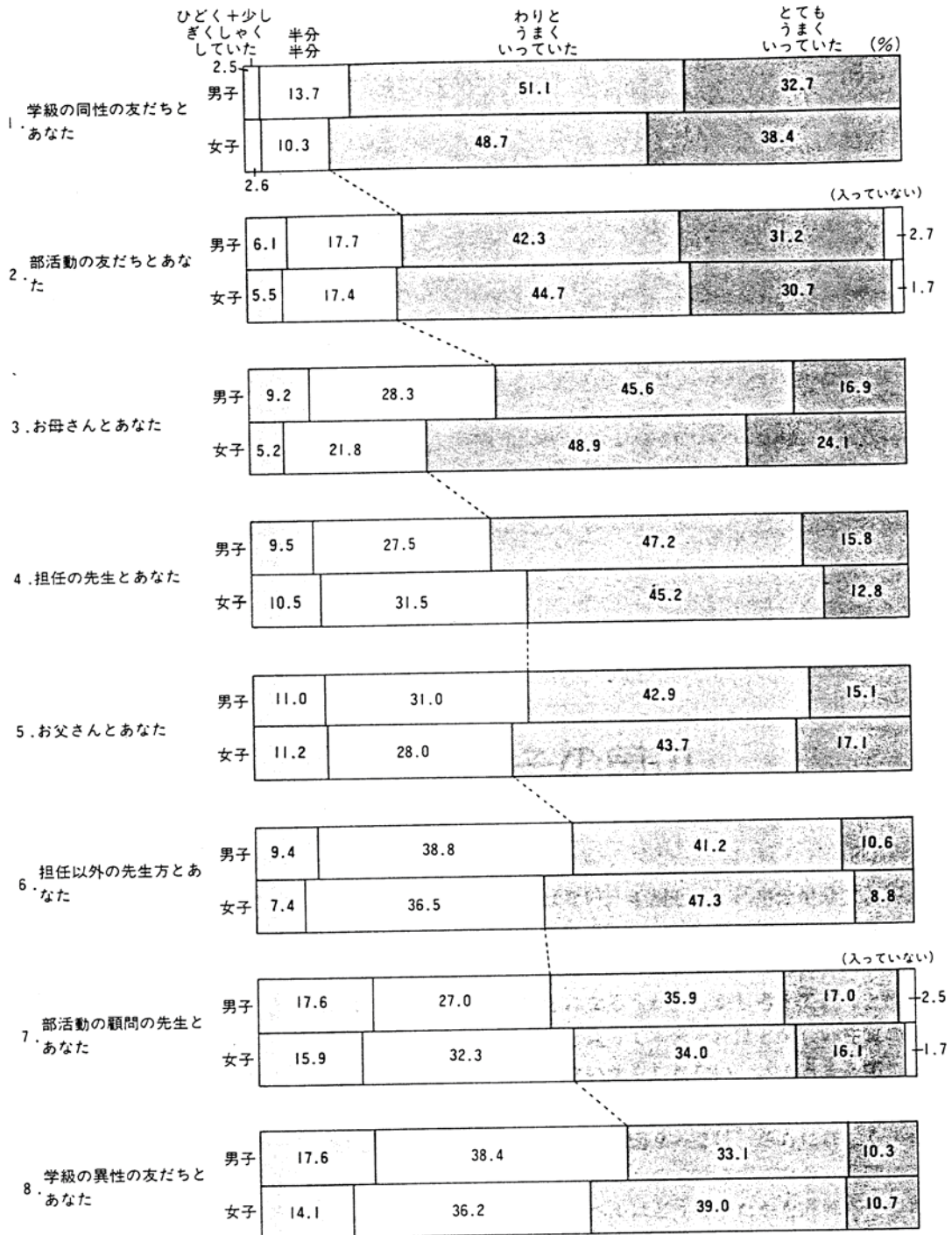
さて1位2位は、ごらんの通り、学級の友だち(同性)と部活動の友だちである。現代においても子どもにとってかけがえのない存在が、親や先生を越えて、「友だち」である様子には、何かほっとさせられるものを感じる。しかしそれに比べて、同じ学級の友だちでも「異性」との関係がこれほどまでに悪いのはなぜだろう。

その点をもう少し追及してみたのが表2である。表が示すように、異性の友だちに全く関心がなかった者は男子37%、女子22%でしかない。かなりの者が、青春時代にふさわしく、多少とも異性に関心をもって中学時代を過ごしたことが推測される。しかし表が示すように、男子の31%、女子の46%は片思いのまま、実をむすばぬ結末を迎えている。

両想いの相手と多少とも(中にはキスやそれ以上の付き合いの経験者も3%近くいるが)つき合った経験をもつのは、男子女子とも3分の1しかいない。この数字は、(中学時代に必ずしも深い関係をもった方がいいとは思わないが)もっとずっと多くてもいいのではなかろうか。学級の半分は異性であるはずなのに、なんと悲しく貧しい青春の姿である。

2-(図8) 中学校時代の人間関係

(中学校3年間の人間関係はうまくいったか)



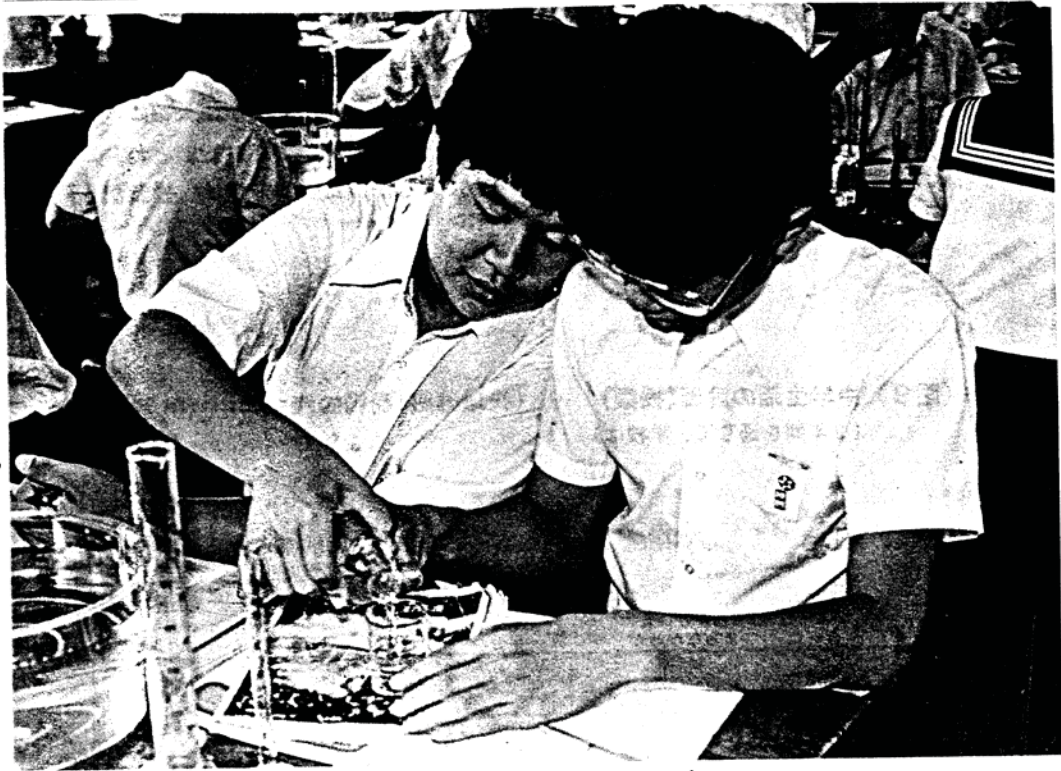
2-(表2) 中学校時代の異性とのつき合い

(異性の友だちとのつき合い・電話やデートなど)

(%)

| つき合い | 性 別 | |
|----------------------------------|------|------|
| | 男 子 | 女 子 |
| そういうことには全く関心がなかった | 37.0 | 21.6 |
| 好きな人はいたが片思いで、 つき合うところまでいかなかった | 30.7 | 46.4 |
| 一人の人と少しつき合ってみたが、すぐやめた | 11.0 | 9.5 |
| 何人かの人と少しつき合ったが、 長続きしなかった | 5.7 | 3.6 |
| 両思いの相手ができただが、 電話や軽いデートぐらいだった | 12.9 | 16.4 |
| キスやそれ以上の深いつき合いを経験した | 2.7 | 2.5 |

第II章 中学生生活の評価



1. 授業とその周辺

さて次に、高校生たちによる中学生生活の評価に移ろう。つい半年前まで在学していた学校とそこでの毎日を、めでたく高校入学を果たした今、彼らはどのように回顧するのだろうか。

〈授業について〉

まず図9-1は、授業への評価である。全体として「つまらない授業だった」と評価する者は、男子の24%女子の17%しかいない。しかし、といて積極的に「楽しかった」と評価する者は、男子36%女子41%で、「つまらなかった」者よりは若干多いが、十分な数

ではない。4割近くが「半分半分」と答えている結果をにらみ合わせると、全体としては授業の楽しさは、「まあまあだった」ということになろうか。しかし考えてみると授業は、遊びと違って本来それほど楽しい性質のものではないかもしれない。「まあまあ楽しかった」くらいでも十分というところかもしれない。そこで図9-2は、さらに詳しく、全体として学力がつく授業だったか、教師の教え方のレベルはどうだったかを評価させてみた結果である。これで見ると「とても力がつく授業」は少ないが「まあ力がつく授業だった」を合わせると、全体の8割前後が、授業の内

容に好意的な評価をしている。そうした意味では、教師たちの教授者としての力量は、一応の評価を得ていると言ってよさそうだ。

さらに図9-3を見ると、教師の人間性についても、同様な評価がされている。「人間味のある良い先生が多かったか」の問いに、「とてもそう思う」者は2割だが、例によって「まあそう思う」を合わせると、これを肯定する者は7割を超える。

〈授業以外の諸活動について〉

さて授業に対する評価はこのくらいにして、授業以外の学校生活に目を移してみよう。

図10-1は、部活動、休み時間、文化祭、旅行などの側面についての評価である。図9-1と比較するとさすがに大幅に「楽しかった」とする者が増えている。「わりと」も含めて楽しかったとする者は、授業が3割強だ

2-(図9) 中学生活の評価(授業) (3年間を通じて、学校は)

1. 授業の楽しさ

| | | とても つまらな かった | どちらかといえ ば つまらな かった | 半分 半分 | わりと 楽しかった | とても 楽しかった |
|---|---|--------------------|-----------------------------|----------|--------------|--------------|
| 男 | 子 | 6.2 | 17.6 | 40.2 | 29.4 | 6.6 |
| 女 | 子 | 4.1 | 12.5 | 42.4 | 33.7 | 7.3 |

2. 全体として学力のつくような授業が多かったか(先生の教え方のレベル)

| | | とても力が つく 授業だった | まあ力が つく 授業だった | あまり力が つかない 授業だった | ぜんぜん 力がつかない 授業だった |
|---|---|----------------------|---------------------|------------------------|-------------------------|
| 男 | 子 | 8.3 | 67.5 | 21.1 | -3.1 |
| 女 | 子 | 10.0 | 75.0 | 13.8 | -1.2 |

3. 人間味のある良い先生が多かったか

| | | とても そう思う | まあ そう思う | あまり そう思わない | ぜんぜん そう思わない |
|---|---|-------------|------------|---------------|----------------|
| 男 | 子 | 20.8 | 51.3 | 23.7 | 4.2 |
| 女 | 子 | 19.6 | 53.0 | 22.7 | 4.7 |

ったのに、図10-1ではそれが7割強になっている。

しかし図10-2で見られるように、そのうち部活動に関しては、思ったより「充実してなかった」とする者が多い。全体の約4割が、「あまり（全く）充実してなかった」と答えている。なぜだろうか。

さて学校生活に関して彼らが最も評価するのは、「友だち」との関係らしい。図10-3の

「気の合う良い友だちが多い学校だったか」の問いには、ほぼ9割が「そう思う」と答えている。つまり、図10-1のように、授業以外の中学生生活が、かくもポジティブな評価をされているのは、それが友だちといっしょにした活動だったからのようである。とすれば学校側は、こうした授業以外のスクールライフをさらに充実したものにするように、今後とも努力していかなければならないのではな

2-(図10) 中学生生活の評価(授業以外)

1. 部活動、休み時間、文化祭、旅行など

| | とてもつまらなかつた | どちらかといえはつまらなかつた | 半分半分 | わりと楽しかつた | とても楽しかつた (%) |
|----|------------|-----------------|------|----------|--------------|
| 男子 | 2.3 5.4 | 17.6 | | 51.0 | 23.7 |
| 女子 | 0.9 3.8 | 17.4 | | 50.5 | 27.4 |

2. 自分の希望するような充実した部活動ができたか

| | とても充実した部活動ができた | まあまあの部活動ができた | あまりできなかった | ぜんぜん不満な部活動だった | はじめから部活動に入らなかつた (%) |
|----|----------------|--------------|-----------|---------------|---------------------|
| 男子 | 17.6 | 39.1 | 34.2 | 6.6 | 2.5 |
| 女子 | 15.9 | 44.0 | 31.4 | 7.8 | 0.9 |

3. あなたと気の合う、良い友だちが多い学校だったか

| | とてもそう思う | まあそう思う | あまりそう思わない | ぜんぜんそう思わない (%) |
|----|---------|--------|-----------|----------------|
| 男子 | 38.6 | 50.2 | 10.0 | 1.2 |
| 女子 | 47.4 | 44.4 | 7.6 | 0.6 |

かろうか。

〈いつが一番よき時代だったか〉

さて図11は、中学生生活をふり返って、いつがいちばん充実していたか、についての結果である。図が示すように、1年より2年、2年より3年と、充実感を感じた者の割合が増えている、これはパート1の、現在中学生である生徒たちの結果とは、やや異なっている。過ぎ去ってみれば、苦しい日々の中で受験直

前の不安やあせりまでが、かえって充実感のもてた時間として記憶の中に定着するようになるのかもしれない。

それにしても、中1では、まあ充実感があったとして、この時期を回顧する者は全体の半分だが、中3ではそれが7割近くにまで増えている。しかし中学の3年間は、彼らにとって、本当にそんなにも充実した日々だったのだろうか。その点確かめてみることにしよう。

2-(図11) いつが一番充実していたか

(3年間をふり返ってみて、いつ頃が、あなたにとっていちばん充実した学校生活だったか)

| | | とても 充実していた | まあ 充実していた | 半分 半分 | (%) あまり+ぜんぜん 充実していなかった |
|-------|----|---------------|--------------|----------|------------------------------|
| 1年生の頃 | 男子 | 14.3 | 34.5 | 30.9 | 20.3 |
| | 女子 | 14.5 | 38.1 | 29.7 | 17.7 |
| 2年生の頃 | 男子 | 16.6 | 37.2 | 28.6 | 17.6 |
| | 女子 | 18.0 | 37.9 | 27.2 | 16.9 |
| 3年生の頃 | 男子 | 24.1 | 38.1 | 23.7 | 14.1 |
| | 女子 | 28.1 | 41.2 | 20.4 | 10.3 |

2. 3年間の体験

図12は、彼らが学校外で、中学3年間にどんな体験を積んだか、それを回顧してもらったものである。図は体験の少ないものの順に並べてある。

まず1から8までを見てみよう。これらは「1度もしたことがない」者が5割を超えている項目である。これらの項目で気づくのは、「学校外でスポーツクラブ等に入ったことがない」「学校行事以外に、友人と泊まりがけの旅行をしたことがない」「アルバイトをしたことがない」「学校行事以外に、サマーキャンプ等に参加したことがない」「コンサートに行ったことがない」「プロ・スポーツの試合を見に行ったことがない」「学校行事以外の展覧会に行ったことがない」など、学校外での文化的行動がきわめて貧しい、生徒たちの青春の日々である。

つまり豊かな人間形成にぜひとも必要な体験が、すべて学校行事に依存している状況が見い出される。学校が設定する諸行事、諸プログラムが、個人差のあるそれぞれの生徒た

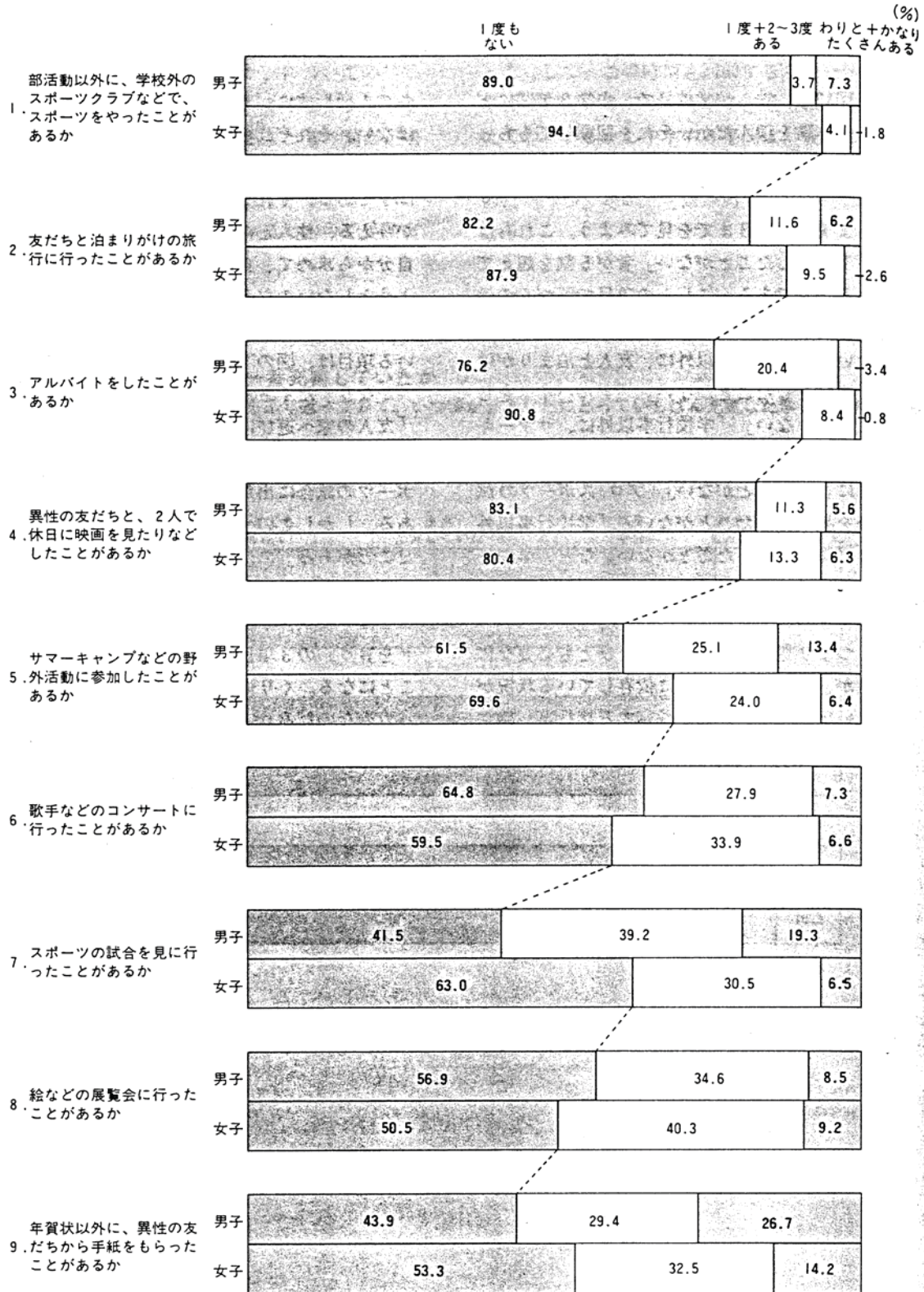
ちの人間形成に、必要十分なものであるはずはない。それぞれの生徒には、それぞれ個性があり、関心や将来の目標の違いも、大きいはずである。それなのに、生徒たちが、学校が与える、他人との共通な体験以外に、なぜ自分から求めて、自分に必要な体験を選択しようとならないのだろうか。

辛うじて生徒たちが比較的数量多く体験している項目は、図の下の部分である。「わりと」「かなり」たくさんあるが5割を超えるのが、「友人の家へ遊びに行ったことがある」「単行本」や「レコードを買ったことがある」「スポーツの試合に出たことがある」の4項目である。しかしこのうち「スポーツの試合に出たことがある」のは、学校の部活動での体験と思われるので、純粋に個人のレベルでしたことは、「友人の家に行く」「単行本」や「レコードを買う」の3項目しか5割を超えていないことになる。くり返しになるが、なんと貧しい青春なのだろう。

か)

2-(図12) 中学校時代の体験

(中学校3年間に、次のようなことを何度ぐらいしたことがあるか)



%)
より
る

| | | 1度も ない | 1度+2-3度 ある | わりと十かなり たくさんある (%) |
|--|----|-----------|---------------|-----------------------|
| 10. 友だちと喫茶店に入った ことがあるか | 男子 | 44.7 | 30.4 | 24.9 |
| | 女子 | 35.1 | 34.4 | 30.5 |
| 11. 家族で、泊まりがけの旅 行へ行ったことがあるか | 男子 | 35.5 | 38.3 | 26.2 |
| | 女子 | 35.2 | 37.7 | 27.1 |
| 12. 仲間のスポーツの試合の 応援に行ったことがあるか | 男子 | 32.0 | 40.0 | 28.0 |
| | 女子 | 28.0 | 46.1 | 25.9 |
| 13. 楽器の練習をしたことが あるか | 男子 | 30.0 | 39.3 | 30.7 |
| | 女子 | 22.7 | 30.2 | 47.1 |
| 14. 同性の友だちと映画を見 に行ったことがあるか | 男子 | 24.9 | 35.8 | 39.3 |
| | 女子 | 23.9 | 38.5 | 37.6 |
| 15. スポーツの試合に出たこ とがあるか | 男子 | 16.7 | 24.1 | 59.2 |
| | 女子 | 28.9 | 27.9 | 43.2 |
| 16. レコードを買ったことが あるか | 男子 | 14.3 | 20.4 | 65.3 |
| | 女子 | 16.9 | 22.9 | 60.2 |
| 17. 自分で単行本を買って (マンガや雑誌でなく) 読んだことがあるか | 男子 | 15.0 | 27.3 | 57.7 |
| | 女子 | 11.7 | 31.1 | 57.2 |
| 18. 友だちの家へ遊びに行っ たことがあるか | 男子 | 3.1 | 7.2 | 89.7 |
| | 女子 | 0.9 | 12.6 | 86.5 |

3. 成長感覚をめぐって

人間の成長は、言うまでもなく体験によってもたらされる。とすると、すでに見てきたような中学生たちの学校外での個人的体験の貧しさは、とりもなおさず、彼らが人間としての幅広い成長という側面で、十分な成長をとげていないことを意味するのではなかろうか。この点について、「成長感覚の有無」という

角度からの接近を試みよう。

成長感覚とは、心理学の用語である。われわれが、昨日の自分に比べ今日の自分が、または1年前の自分と比べて今の自分が、何らかの点で成長していることを感じとることができるかどうかは、われわれの適応状態を示す一つの指標とも言えるだろう。

2-(図13) 成長感覚 (男子)

(中学校3年間でふり返って、あなた自身は、小学校6年の頃とどこが変わってきたと思うか)

| 小学校の頃よりも | とても+まあそう* (プラスの成長) | (不変) | (%) (マイナスの成長) |
|-------------------------|-----------------------|------|------------------|
| 1. 体力がついてきた | 72.5 | 20.1 | 7.4 |
| 2. 友だちが増えてきた | 71.0 | 23.2 | 5.8 |
| 3. スポーツが好きになってきた | 57.7 | 36.5 | 5.8 |
| 4. 家で勉強する時間が長くなった | 54.1 | 26.7 | 19.2 |
| 5. どう生きるか人生について悩むようになった | 47.7 | 45.7 | 6.6 |
| 6. 芸能界のことに詳しくなった | 45.9 | 39.2 | 14.9 |
| 7. おしゃれに気をつかうようになった | 43.4 | 46.5 | 10.1 |
| 8. 成績が上がってきた | 43.0 | 37.1 | 19.9 |
| 9. がまん強くなった | 42.9 | 48.6 | 8.5 |
| 10. 将来に夢をもつようになった | 33.6 | 50.2 | 16.2 |
| 11. 勉強を頑張るようになった | 33.0 | 48.7 | 18.3 |
| 12. 明るくなった | 31.0 | 58.1 | 10.9 |
| 13. 字がきれいになってきた | 30.0 | 55.1 | 14.9 |
| 14. 友だちに親切になった | 28.6 | 68.3 | 3.1 |
| 15. まじめな友だちとつき合うようになった | 27.9 | 58.5 | 13.6 |
| 16. テレビを見なくなった | 24.1 | 47.1 | 28.8 |
| 17. 先生を尊敬するようになった | 22.8 | 57.1 | 20.1 |

すなわち人間の持っている動機を、マズロー (Maslow, A. H.) にしたがって「欠乏動機 (生理学的欲求、安全欲求、所属欲求、愛情欲求、尊敬欲求などが充足されていない時に、これを充足しようと行動する力)」と「成長動機 (自己実現を求めようとする力)」とに分けるとしたら、成長感覚は、自分が少しずつ自己実現へ近づいているという感覚であり、深い満足と安定感とにつながるものである。

換言すれば、人は常に成長感覚をもって生活していくことが、その人の生きがいを生み

出すものであり、一つの生き方の理想とも言えるかもしれない。

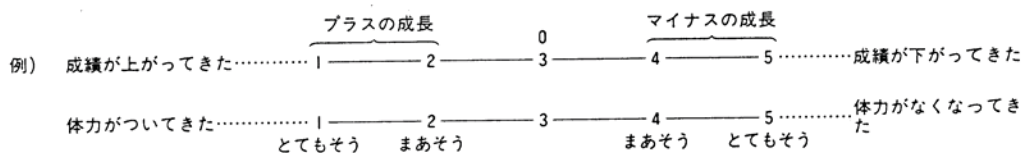
しかも、成長盛りの子どもの時代を過ぎたとはいえ、中学時代の3年間は、幼児期や児童期につぐ急激な成長を、特に精神的な面で体験しなければならない時期である。この3年間について、それぞれの生徒は、どんな領域で自分の成長を確認しているのだろうか。

〈どこに成長感覚がもてるか〉

図13・図14は、男子と女子とのそれぞれに

| | とても+まあそう* (プラスの成長) | (不変) | (マイナスの成長) |
|----------------------|-----------------------|------|-----------|
| 18. 親を尊敬するようになった | 22.5 | 63.3 | 14.2 |
| 19. 勉強が好きになった | 22.4 | 61.1 | 16.5 |
| 20. もの覚えがよくなった | 21.6 | 61.0 | 17.4 |
| 21. まじめになった | 21.2 | 61.9 | 16.9 |
| 22. きちようめんになった | 21.0 | 62.5 | 16.5 |
| 23. 家の手伝いをするようになった | 17.5 | 63.1 | 19.4 |
| 24. 正直になった | 16.3 | 75.3 | 8.4 |
| 25. 金をつかわなくなった | 12.8 | 39.8 | 47.4 |
| 26. 自分が好きになった | 12.6 | 69.8 | 17.6 |
| 27. 親に何でも正直に言うようになった | 8.9 | 66.0 | 25.1 |
| 28. 言葉づかいがよくなった | 8.0 | 60.0 | 32.0 |

*) プラスの成長とは、必ずしも青年期における自我発達上の望ましさを意味するものとしては、分類していない。



ついて、28の領域で、「小学6年生の頃と自分はどこがどれくらい変わってきたか」を尋ねた結果である。図はポジティブな方向について「とても+まあそう（成長した）」をプラスの成長感覚として図示してある。

男子について見ると、成長感覚が著しい領域(プラスの成長が50%を超えている項目)は、「体力がついてきた」「友人が増えてきた」「スポーツ好きになってきた」「家で勉強する時間が長くなった」の4つだけである点に、まず気がつく。5番目以下は、「不変」と「マ

イナスの成長」を合わせると、プラスの成長を感じとっている者より、割合が多くなっている。

また女子についても同様に見ていくと、成長感覚をもつ者が50%を超えるのは、「友だちが増えてきた」「おしゃれに気をつかうようになった」「体力がついてきた」「芸能界のことに詳しくなってきた」などである。「友人が増えた」「体力がついた」は男子と共通で、成長感覚の種類としてはまあまあのものだと言えそうだが、他の2つは、成長感

2-(図14) 成長感覚 (女子)

(中学校3年間でふり返って、あなた自身は、小学校6年の頃とどこが変わってきたと男うか)

| 小学校の頃よりも | とても+まあそう* (プラスの成長) | | | (不変) | (マイナスの成長) |
|-------------------------|--------------------|------|------|------|-----------|
| | % | | | | |
| 1. 友だちが増えてきた | 77.0 | 19.0 | 4.0 | | |
| 2. おしゃれに気をつかうようになった | 63.2 | 31.5 | 5.3 | | |
| 3. 体力がついてきた | 53.9 | 33.0 | 13.1 | | |
| 4. 芸能界のことに詳しくなった | 51.7 | 35.1 | 13.2 | | |
| 5. 家で勉強する時間が長くなった | 49.7 | 31.1 | 19.2 | | |
| 6. スポーツが好きになってきた | 48.0 | 43.0 | 9.0 | | |
| 7. どう生きるか人生について悩むようになった | 47.9 | 45.5 | 6.6 | | |
| 8. がまん強くなった | 42.9 | 51.1 | 6.0 | | |
| 9. 明るくなった | 41.5 | 50.5 | 8.0 | | |
| 10. 将来に夢をもつようになった | 36.9 | 48.0 | 15.1 | | |
| 11. 成績が上がってきた | 36.8 | 39.4 | 23.8 | | |
| 12. 字がきれいになってきた | 32.9 | 56.6 | 10.5 | | |
| 13. 家の手伝いをするようになった | 32.8 | 52.5 | 14.7 | | |
| 14. 勉強を頑張るようになった | 30.3 | 53.7 | 16.0 | | |
| 15. 友だちに親切になった | 28.9 | 67.6 | -3.5 | | |
| 16. まじめな友だちとつき合うようになった | 24.1 | 68.4 | 7.5 | | |
| 17. テレビを見なくなった | 23.6 | 48.1 | 28.3 | | |

覚の上位に位置する項目としては、ややお粗末な感じもする。

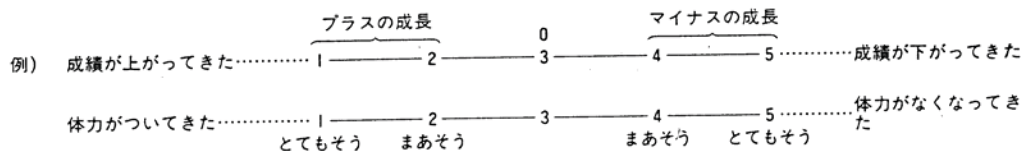
逆に、明らかにマイナスの成長感覚をもっている領域としては、男子は「金づかいが荒くなった」「親にウソをつくようになった」「言葉づかいが悪くなった」であり、女子は「金づかいが荒くなった」「言葉づかいが悪くなった」「自分が嫌いになった」である。

また28項目の数値を平均して作図したのが図15である。他に比較のデータがないので解釈が難しいが、全体としては「不変」の割合

が多く、思ったより「成長感覚」がもてていないように見られる。小学校6年と高校の1年生とを比べると、まさに子どもとおとな、という変化を外見的には感ずるのだが、本人たちは、見かけの変化の割には、内的な成長感覚をもてないものである。これが本当に、こうした各領域での本人の成長の不足を意味するものなのか、それとも本人の感じ方の問題かは別として、大切なのは、少なくとも中学時代をふり返る時、それが自分たちの大きな成長をもたらした期間として

| | とても+まあそう* (プラスの成長) | (不変) | (%) (マイナス) の成長 |
|---------------------|-----------------------|------|----------------------|
| 18.先生を尊敬するようになった | 20.6 | 63.6 | 15.8 |
| 19.勉強が好きになった | 18.6 | 65.5 | 15.9 |
| 20.きちょうめんになった | 18.0 | 73.0 | 9.0 |
| 21.正直になった | 17.9 | 76.3 | 5.8 |
| 22.親を尊敬するようになった | 17.8 | 70.5 | 11.7 |
| 23.まじめになった | 13.9 | 70.3 | 15.8 |
| 24.もの覚えがよくなった | 13.7 | 70.8 | 15.5 |
| 25.親に何でも正直に言うようになった | 12.7 | 66.6 | 20.7 |
| 26.金をつかわなくなった | 8.8 | 51.3 | 39.9 |
| 27.言葉づかいがよくなった | 8.2 | 57.5 | 34.3 |
| 28.自分が好きになった | 7.3 | 63.9 | 28.8 |

*) プラスの成長とは、必ずしも青年期における自我発達上の望ましさを意味するものとしては、分類していない。



2-(図15) 成長感覚 (平均)

| | プラスの成長 | 不変 | マイナスの成長 (%) |
|----|--------|------|-------------|
| 男子 | 31.9 | 51.9 | 16.2 |
| 女子 | 31.4 | 53.7 | 14.9 |

は、評価されていないという点だ。その意味で、高校生たちの、すでに見てきたような中学生時代に対する好意的な評価の裏には、自分の成長には大して寄与しなかった学校段階、という意識が横たわっているのではなかろうか。

<学力との関連で>

ここでもう一つ別の分析を加えてみよう。成長感覚に個人差が見られるのは当然だが、その一つの要素に、成績の良し悪しがあるとも考えられる。すなわち成績の良い子は、大きな成長感覚をもち、成績の悪い子は、それがもてないということもあるのではないだろうか。

この点を学力をキーにして分析してみたところ、男子女子とも成績上位群と下位群間に成長感覚の差があったのは

- 勉強が好きになった
- 成績が上がってきた
- 家で勉強する時間が長くなった
- 勉強を頑張るようになった
- 将来に夢をもつようになった
- スポーツが好きになった

の6項目だけであった。ほとんどが勉強に関する項目であり、その意味からも、この結果は当然のものだろう。多くの成長感覚は特に学力とは関係なしに個人の中に生じてくるものようである。

4. 成長感覚の構造

しかしこうした成長感覚の生じ方には、何らかの構造があるとも考えられる。そこで、これらの項目に対する反応を用いて、数量化Ⅲ類で処理した結果が表3・図16・図17である。

表3の各アイテムの並び方を見てみると、図17にも示したように、生徒たちの成長感覚には3つの方向があるように思われる。

1つはⅡ軸の各アイテムの並び方に表れているように「勉強が好きになって、成績が上がってきた自分」の成長感覚であり、次いでⅢ軸の「ワクにとらわれなくなった自分（権威に反発するようになった自分）」、最後にⅠ軸の「自己受容ができるようになった自分(ありのまま、自然にすなおに行動できるようになった自分)」の成長感覚である。

このうちⅡ軸とⅢ軸を組み合わせて作図したのが図16であり、その意味をまとめてみたのが図17である。

この図に示したように、生徒たちの成長のタイプ（プラスもマイナスも含めて）には、3つがあるように思われる。

1つは「いい子」への方向（成長）で、成績の上昇がキーである。ただし成績が上昇しても、ワクにはまる方向へ成長するタイプと、

逆に、ワクから逸脱するタイプの「いい子」が見い出される。ワクにはまる方では、権威への同一化を特徴とする（やや若者らしくない、いわば優等生、模範生型の）いい子であるし、もう一つは、エネルギーにあふれたいかにも青年期的な（やや逸脱しかけておとなの手を焼かせる）やんちゃ型の「いい子」である。

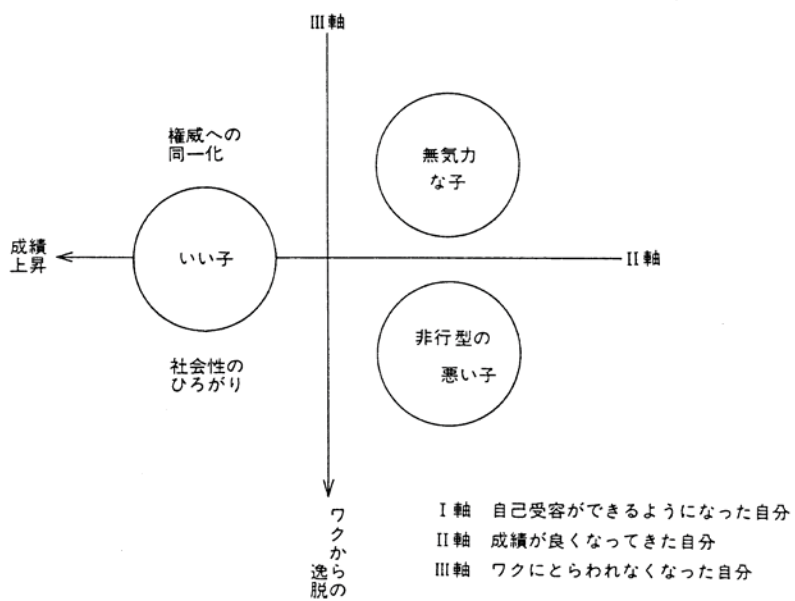
他は成績の下降した場合で、もう一本の軸として「ワクへの同一化」方向をたどると、これは「悪い子」というより無気力型の若者像となる。また「ワクからの逸脱」方向をたどると「非行型」の悪い子になっていく。

また図17が示すように、無気力型と非行型は、各象限にタイプが分かれるが、いい子型は、理論的にはⅢ軸上で大きく移動して、模範生型とやんちゃ型に分かれてもよさそうだが、実際はⅢ軸の上では、ほとんど原点近くにかたまっていて、いい子のタイプはダンゴ状になっている。成績の良い子は、現代では権威に対して、極端な同化も極端な反発もしない者のようである。しかしいずれにしてもこの層に属する生徒たちの数は、ごく一部と思われる。

2-(表3) 成長感覚数量化Ⅲ類カテゴリー・ウエイト

| II 軸 | | III 軸 | | I 軸 | |
|----------------|---------|------------------|---------|----------------|---------|
| がまんができなくなった | 4.8816 | 友だちが減ってきた | 6.7303 | 自分が好きになった | 3.2590 |
| 友だちが減ってきた | 3.9956 | おしゃれに無関心になった | 5.8631 | 親に正直に言うようになった | 2.5675 |
| スポーツが嫌いになった | 3.7757 | スポーツが嫌いになった | 3.7734 | 正直になった | 2.5565 |
| 友だちに冷たくなった | 3.5639 | 芸能界のことに関心がなくなった | 3.7574 | まじめになった | 2.4758 |
| ウソをつくようになった | 3.6226 | 人生について悩みをもたなくなった | 3.1562 | 言葉づかいがよくなった | 2.4491 |
| 勉強に手をぬくようになった | 3.5889 | ネクラになった | 3.1447 | 勉強が好きになった | 2.2181 |
| だらしなくなった | 3.4551 | 友だちに冷たくなった | 2.9524 | きちょうめんになった | 2.1202 |
| 体力がなくなってきた | 3.3102 | 体力がなくなった | 2.9053 | もの覚えがよくなった | 2.0005 |
| 勉強が嫌いになった | 3.2850 | がまんができなくなった | 2.5897 | 親を尊敬するようになった | 1.9092 |
| いいかげんになった | 3.1613 | 金をつかわなくなった | 1.8576 | 友だちに親切になった | 1.8009 |
| ⋮ | | ⋮ | | ⋮ | |
| 金づかい変わらない | -0.6686 | いいかげんになった | -1.1828 | おしゃれ変わらない | -0.9565 |
| 先生を尊敬するようになった | -0.6987 | 金づかいが荒くなった | -1.2981 | 明るさ変わらない | -1.0027 |
| 将来に夢をもつようになった | -0.7718 | ウソをつくようになった | -1.4075 | 成績変わらない | -1.0615 |
| まじめになった | -0.8109 | おしゃれに気をつかうようになった | -1.4465 | 体力変わらない | -1.1293 |
| 家で勉強する時間が長くなった | -0.8860 | 芸能界のことに詳しくなった | -1.5821 | 芸能界のこと変わらない | -1.1524 |
| きちょうめんになった | -0.8958 | 言葉づかいが悪くなった | -1.6354 | 勉強変わらない | -1.1614 |
| 親に正直に言うようになった | -0.9127 | 先生を尊敬できなくなった | -1.7153 | がまん変わらない | -1.1620 |
| 成績が上がってきた | -1.0991 | 親を尊敬できなくなった | -2.3252 | 勉強時間変わらない | -1.1968 |
| 勉強を頑張るようになった | -1.3425 | 親の目をごまかすのがうまくなった | -2.5302 | スポーツ好きでも嫌いでもない | -1.3425 |
| 勉強が好きになった | -1.3953 | 悪い友だちとつき合うようになった | -3.3192 | 友だちの数変わらない | -1.5172 |

2-(図17) 成長感覚の構造とタイプ



5. 中学生活についての後悔

きて以上のように、「成長感覚」のもてない中学生時代を終えた後で、彼らは中学生活にどんな後悔や反省をもっているのだろうか。最後にその点を見てみよう。図18は、中学生時代について後悔の大きい項目の順に並べてある。

まず上位にきているのは、1「ふだんからもう少し頑張って勉強しておけばよかった」、4「もっと受験勉強を早くからしておけばよかった」である。先に見てきたように、たしかに、精一杯打ち込んだとは言えない勉強ぶりだったから、この後悔はむべなるかな、であろう。3位に「部活動にもっと打ち込めばよかった」があげられている。すでに見てきたように、勉強よりは部活動に打ち込んだエネルギーの方が大きかったとも見なされるものの、若いエネルギーは、まだ燃焼しつくしていなかったのだろう。

そしてその後に5「もっとコンサートに行きたかった」、6「もっと読書がしたかった」、7「スポーツがしたかった」、8「ガールフレンドやボーイフレンドがほしかった」、10「もっと趣味に打ち込む時間がほしかった」など、文化活動、人間としての教養の幅を広げる機会をもっともちたかったとする項目が並んでいる。

しかし、よく見ると、それらの項目に対する反応は、せいぜい1割から3割まででしか

ない。つまりほとんどの項目について、「それを中学時代にもっとしたかった」とする後悔は、むしろ少数の者が感じているだけで、全体としては、思ったほどそうした後悔がされていない結果でもあるようだ。

そう思ってデータを眺め直すと、5割の者が感じているのは、1「勉強をもっとしておけばよかった」で、それ以下は、「思わない」と答えている者の割合が、項目を追うにしたがって急速に増えていく。どちらかと言えば、男子より女子の方が多少後悔している者の割合が多いものの、その差を問題にするよりも、とにかく全体として「後悔していない」と答える者の割合の多さが目をひく。

規則づくめの今の中学校の状況を考え、またこれまでのデータが示したような、学校を離れた個人の生活が乏しい中学校時代を考えると、生徒たちがその精神的にも、文化的にも貧しい状況に慣れてしまって、それに不満やあせりの気持ちを、今ひとつ持っていないように思える状況、またたとえ渦中にある時にはいくばくかの不満があったとしても、過ぎてしまえば、「あんなものだ」として、その問題点をも忘れていく——そんな傾向を推測させるこのデータが、なんとも不気味で、嘆かわしい気がする。読者の方は、どうお思いだろうか。

2-(図18) 中学生生活をめぐる後悔

(今、ふり返ってみて残念に思うことがあるか)

